

# 認定 NPO 法人ザンビアの辺地医療を支援する会

## ORMZ ニュース第 140 号 (R5.4.8)

事務局：宮崎市生目台西 4-7-7 (メール info@ormz.or.jp) 文責：日高良雄



**はじめに** 4月は年度の始まり、入社式、入学式と新たな一步を踏み出す方があちらこちらで笑顔を見せています。桜も散る頃となっていますが、気持ちが明るくなりますね。

さて、ORMZ ニュース第 140 号では、巡回診療の活動報告、現地の話題と共に、巡回診療に同行されたカメラマンの上山さんのご報告等をお届けします。

皆様には引き続きのご支援をどうぞよろしくお願い致します。

### 会の経過報告等

- ・例年依頼を受けている、東京商工リサーチからの企業情報調査票に回答しました。
- ・法人税減免のため、県と市の税務担当部署に出向き、減免申請を行ってきました。
- ・会の新しいパンフレットを皆様に郵送しました。よろしければご友人等にもお見せください。

### 現地の状況、事務所だより (山本ひとみ)

#### 【新型コロナウイルス感染症】

・この 1 ヶ月間の感染者報告数ですが、報告が確認できた 12 日間では、最多が 41 人、最小 4 人で、平均は 18 人という状況です。

#### 【巡回診療】

**3月22日 ニャンカンガ** 診療数 183 名、内マラリア陽性数 33 名 妊産婦検診 20 名 道中の診察 0 名

- ・主な訴え、疾患等：気道感染症、頭痛、皮膚疾患、腰痛などからだの痛み、胃腸炎
- ・重症例：なし
- ・5 歳未満の児童 27 名が予防接種を受けた (予防接種の種類：はしか、ポリオ、PCV(肺炎)、BCG(結核))
- ・道路に水は残っていたが、ぬかるみはひどくなく、往復順調に進めた。
- ・仮診療建物のカルテが保管してある部屋のガラス窓が割られ、カルテノートが複数冊盗まれたようだ。
- ・帰国された人からもらった薬を割る機械が役に立った。
- ・NPO 法人ロシナンテスのスタッフ 2 名がムワプラヘルスポストのマザーシェルターで出産した女性 4 名のモニタリングを行うため巡回診療に訪問された。
- ・6 ヶ月の子に授乳中の女性がファミリープランニングに来られた。授乳に影響が出る可能性もあるため、薬・注射の対応はせず。今後、授乳中の女性に処方できる薬の準備について検討が必要と感じた。

#### 【ザンビア生活あれこれ】

・首都であるルサカ内では道路灯のあるところが増えてきました。道路灯はソーラーパワーを利用。暗くなってくると明るく灯ります。

(→ がソーラーパネル)



## 巡回診療同行記録（上山敦司氏より原文のまま）

ザンビアには、他の NGO 団体を取材する関係で2月に訪れましたが、ORMZ さんが辺地医療を実施されているとことを知り、同行させていただきました。

この時期は雨季のため雨が多く、首都ルサカでも道路が川のようにになっているところがありました。この状況で、辺地に向かうのは、リスクを伴うため、2月で同行できる可能性があるのは22日の1度のみとのこと。前日に雨が降り、未舗装の道が寸断されてしまえば、当日中止もありえるなか、実施日を迎えました。

朝6時に出発。クリニックオフィサー（準医師：日本にはない）2人、看護師4人、助産師1人、ドライバー3人、ORMZさん現地マネージャーさんと私が、車2台に分かれて現地へ。

舗装道路を1時間ほど走ると未舗装の道に入り、拠点となる村をすぎたところからは道といえるかどうか分からないところを走りました。なんの目印もない分かれ道も、迷うことなく走っていきな、前の車が突然ストップしました。

その先で荷物を積んだトラックが沼地と化したところで完全にスタックしていたのです。トラブルが起きてから1日ほど経つか、塞がれた横のブッシュが伐採され、沼地に木々が敷き詰められて簡易の道らしきものができています。スタッフは全員降りて、車体を軽くしてそこを抜けようとしたのですが、うまくいかず1台がスタック。もう1台が牽引して脱出できましたが、その先にはまた幅20mほどの小川があります。

向こう側にいた村人が、川に入ってこちらに駆けつけてくれましたが、膝上を軽く超える水位でした。川に入るところが雨でえぐられて急斜面に。そのまま入ると車がひっくり返りそうな場所を、どのようなルートで侵入するかをドライバーたちが念入りにシミュレーション。そろそろと斜面を降りて川に入ると浸水しそうな深さのところを大きな水飛沫をあげて走り抜け、見事にクリアしました。

その後も、難所があり想定よりも時間がかかりましたが、11時ごろ本日の診療地ニャンカンガに到着しました。2016年に村の人とORMZさんが建てた診療用の建物がその場所です。すでに患者が集まってきています。スタッフは、車から降りるやいなや診療の準備に。

今回は、受付、マラリア検査エリア、診察（クリニックオフィサー）室、妊婦健診&ファミリープランニング室、薬局、5歳未満の体重測定エリア、ポリオワクチンの経口摂取エリアに分かれています。

小さな建物があるだけのところに、30分もしないうちに診療機能が整い、スタッフも患者も混乱することもなく、診察は始まっていきます。

月に1回の巡回診療は、医療へのアクセスが難しい地域にとっては、本当にありがたいことだと思います。症状に応じて40種類以上の薬が処方され、必要な場合は注射も行われます。ザンビアは、HIV感染者が多い国でもあり、辺境の



村も例外ではありません。必要に応じて HIV 検査も行われるなど、ORMZ さんの活動によって救われた命も多いでしょうし、重篤にならずに済んだ患者はさらに多いに違いありません。

12 時を過ぎると、患者や子どもたちの定期検診に訪れる人たちなど、100 人以上が集まってきています。

これだけの人が集まってきているのに、患者や村人たちは手順にそって流れていきます。混乱もなく診察が行われているのは、村の長のリーダーシップによるところが大きいそうです。診療の仕組みづくりや村人への周知だけでなく、各地区の担当から村人の健康チェックやマラリア検査薬の在庫状況などの情報を取り一元管理されるなど、スタッフからもかなり評価が高い様子でした。

月に 1 回の巡回診療には、患者だけでなく、妊婦さんや小さな子どもを持つ親たちが集まってくるため、ちょっとした社交の場にもなっているようです。女性たちは新しいチテンゲ（伝統的な布。村では 99% の人が腰に巻いたり、子どもを背負うのに使っている）をロングスカートのように巻き、きれいな洋服を着ておしゃれをしています。赤ちゃんにはきれいな服を着せ、よそ行きの靴をはかせ、毛糸の帽子をかぶせて、かわいさを競っているようにも見えます。

もしかすると、女性がこの日だけは、農作業を他の家族にまかせて外出できる機会になっているのかもしれない。医療の届かないところに医療を届けるだけでなく、村人たちのコミュニケーションの機会を提供する場にもなっているようで、その意味でもこの活動は村人たちにとって有意義だと感じます。

最後の患者の診察が終わったのが 16 時すぎ。机の上のにりきらないほどたくさん持ち込まれた薬はわずかとなり、残念ながら後半の患者には行き届かなかった薬もあったそうです。

片付けを開始し、村人からザンビアで伝統的なシマと料理をいただき帰路についたのが 17 時ごろ。

帰りは遠回りになりますが別の安全なルートで帰ることに。安全とはいえ、未舗装の悪路に、大きな水たまりや川と化した道路など、決して快適ではありませんでしたが、一度も車を降りることがなかったという意味では、行きの道よりもよかったです。滞在先に戻ったときには 22 時を過ぎていました。



今回同行させていただいたニャンカンガへの道のりは大変な悪路でしたが、ORMZ さんが辺地医療を実施されている 4 つの地域のなかでは、一番アクセスしやすいそうです。車でアクセスが悪いということは、徒歩が移動の中心になっている村人にとって、診療所へのアクセスはさらに大変です。農業を主としている村人にとって、その土地を離れることは容易ではないな

